

文化財指定された特攻戦没者の手記

坂元恒太

はじめに

本稿は、特攻隊員が書き残した手紙や遺書などの個人的記録を歴史資料として捉える視点を主題とする。

戦後七十年目を迎えた平成二十七年七月、南九州市教育委員会は、南九州市文化財保護審議会の答申を受けて、知覧特攻平和会館収蔵資料の一部を知覧特攻戦没者の手記十八点と、なでしこ隊「特攻日記」一点を市指定有形文化財（歴史資料）に指定した。

これまでも、南九州市及び旧知覧町が太平洋戦争（大東亜戦争）に関わる歴史遺産を文化財として指定した事例はあったが、特攻戦没者の手紙や遺書、勤労動員した女学生による当時の日記などの、紙に記された個人的記録を文化財と位置づけたことは初の試みであった。筆者は当時、南九州市教育委員会文化財課に在籍しており関係事務に従事した。全国的にみても類似資料の前例がない中で、どのような視点で本市文化財保護審議会での検討事案として提示できるかということを模索した経緯がある。その後の人事異動で、筆者は知覧特攻平和会館内に事務所を置く世界の記憶推進室に配属され現在に至る。文化財への指定は、平成三十年五月に開催された知覧特攻平和会館企画展「出撃直前の遺書」の開催にも繋がった。筆者は、これらの業務の末座に連ねていた者の責務として、特攻戦没者の手記が、どのような視点で歴史資料として捉えられたのかについてここに記録し、今後の課題について述べたい。

1. 特攻戦没者の手記に関する先行研究

特攻戦没者の手記に関する先行研究として、森岡清美氏による社会学の観点からのアプローチがある（森岡清美一九九一『決死の世代と遺書』新地書房、一九九五『研究資料としての戦没者の既刊手記』『淑徳大学研究紀要』淑徳大学三一（三二七頁））。

森岡氏は、手記を広義には「自らの経験したところについて、自分で記録するか口頭で陳述して作成された記録」と定義し、自伝、生活史、日記、書簡、狭義の手記、その他（文学・作文等）を含む個人的記録として捉えている（森岡一九九五・三二二頁）。

森岡氏は、戦没者の手記の資料的価値を、「死に直面した人々がもつ苦悩、悩み、願望、彼らにとっての心の拠りどころ、死に直面して到達した死生観、死の意味づけ等をあらわにすることが、挙げられよう。さらには、この点で同じ年齢層（世代）の人々に共通する特色や、世代と歴史的状況との関わりあい等に関する情報を得ることができるとも、重要である。これらについては、第一次資料といっても差し支えないだろう。」とし、その資料的欠陥、研究資料として用いる際に留意する点を挙げている（表1。同書三一六頁）。そして、資料的欠陥を補うためには、手記の書き手を世代別経歴別等にもみるマクロレベルの相互補完と、戦隊単位別等にもみるメゾレベルの相互補完の手法があるとした（同書三一七～三一九頁）。森岡氏は大正9～12年（一九二〇―二三）生まれを一つの世代とみて「決死の世代」と呼んで利用する手記をこの世代のものに限っている。メゾレベルの相互補完の一例として、万世基地から出撃した七三振武隊の隊員がそれぞれの紙に認めた遺書の体裁が整っており、出撃前夜に兵舎で順々に書いていったことが想像できることを示した（同書二一八～二一九頁）。なお、既刊手記にみられる問題点として、

転写の際の誤り、手記を提供する際に選別された可能性、編集者により選別や変形がなされることがあると指摘している。

本市の指定事務の検討作業では、特攻戦没者の手記を歴史資料として評価するために、以上の先行研究を参考にした。名称は、知覧特攻平和会館収蔵資料の日記・遺書・手紙・葉書・辞世・遺詠・遺筆など多様なものを包括する言葉として、広義の手記の語を用いることにした。資料を選別するにあたり、メゾレベルでの相互補完の手法を取り入れ、知覧から出撃した特攻戦没者に絞り、知覧において最後の出撃命令を受けた後に、出撃直前に書かれたであろう手記という基準を設けた。世代別に分類するというマクロレベルの相互補完は取り入れていないが、異なる時代思潮の感化を受けたことの違いをみることや、職業軍人と学徒出身者の手記を比較するなどの手法は、今後の研究の課題と成り得るだろう。

表1 戦没者の手記の資料的価値と欠陥
(森岡1995より作成)

戦没者の手記のうち、死に臨んで書かれたもの (遺書・遺詠など)	
資料的欠陥	資料的価値
・信頼性。 遺書や辞世の場合、定型的文章がみられ、他人に見られても恥ずかしくないようにと自己規制が加わった。 ・完璧性 思いの意識化、意識したことの文章化という二重の障壁があるため、戦没者の思いが悉く吐露されている保障はない。 ・代表性 高学歴者、筆まめな人々、死期が予見できた人々、内地に勤だった人々、特攻隊など手記が残しやすい部隊の人々の手記に偏っている。	・死に直面した人々がもつ苦悩、悩み、願望、彼らにとっての心の拠りどころ、死に直面して到達した死生観、死の意味づけ等をあらわにする。 ・同じ年齢層(世代)の人々に共通する特色や、世代と歴史的状況とのかかわりあい等にかんする情報をえることができる。 ・訓練の状況や隊内の生活、戦闘経過等の主観的ならびに客観的情報をえることができる。 (正確さを期するためには公式記録や当時の記録・回顧録と照合する必要があるため1次資料とはいえない。)

表2 太平洋戦争に関する南九州市の指定・登録文化財

市指定文化財：有形文化財（歴史資料）			
	名 称	員数	指定年月日
1	知覧特攻戦没者の手記	18点	H27.7.21
2	なでしこ隊「特攻日記」	1点	H27.7.21
市指定文化財：記念物（史跡）			
1	旧知覧飛行場 給水塔	1基	S53.5.11
2	旧知覧飛行場 油脂庫	1基	H27.2.17
国登録有形文化財：建造物			
1	旧陸軍知覧飛行場 防火水槽	1基	H19.7.31
2	旧陸軍知覧飛行場 弾薬庫	1基	H19.7.31
3	旧知覧飛行場 着陸訓練施設鎮礎	1基	H19.7.31

2. 経緯と選定事由

（1）指定に向けた検討に至る経緯

南九州市文化財保護条例第四条には、「教育委員会は、市の区域内に存する文化財のうち市にとって重要なものを」、市指定文化財に指定することができるものと定めている。特攻の史実は、南九州市の歴史に極めて重要な事項である。旧知覧町では、太平洋戦争に関する史跡として、知覧飛行場の施設の一部を昭和五十三年に知覧町指定文化財（史跡）に指定、建造物は平成十九年に国の登録有形文化財に登録された。平成二十七年には戦後七十年目を迎えることから、先行する指定・登録文化財に加えて、新たに他の史跡や歴史資料の文化財指定について検討する機運が高まったのである。

また、知覧特攻平和会館収蔵資料を文化財として捉えることへの関心の高まりは、南九州市がユネスコ世界記憶遺産（世界の記憶）への登録申請を推進している時期でもあったことも契機の一つとして挙げられる。南九州市は、平成二十五年に三三三点、平成二十七年に四二七点を申請したが国内審査で落選した経緯がある。

文化財指定への検討作業は、平成二十五年の申請リスト三三三点を検討対象とした。指定を検討するにあたっての基準を、次のように設けた。前提として、知覧特攻平和会館に寄贈された所蔵資料であることを前置きしておく。

大分類 知覧飛行場から出撃した特攻戦没者のもの
中分類 出撃直前と推測できる記載事項があるもの
小分類 知覧において記載されたと推測できるもの

知覧特攻平和会館は、陸軍沖繩戦における特攻戦没者一〇三六名の関係資料を保存・展示しその記録を後世に残すことを目的に建立された施設である。このうち知覧からの出撃者は四三九名であり、彼らの手記の中から出撃直前に記されたものを指定基準とした。知覧特攻平和会館には、一人の隊員の遺品に遺書や手紙など複数の手記がある場合も多いが、このうち、出撃直前ののであれば、前線基地である知覧飛行場において記されたものの可能性があり、知覧（現南九州市）でおきた歴史的事象を示す歴史資料であると考えた。

まず、大分類として、検討対象三三三点のうち、知覧飛行場から出撃した隊員のものは八三人分一三六六ある。次に中分類として、特攻戦死日の前日や前々日の日付が記載されているものや、「出撃前夜」「出撃直前」「愈々征きます」など、出撃の直前であることが推測できるものを拾い上げた。さらに、前線基地である知覧に到着後に、知覧の地で記されたと推測できるものを分類して、十八点に絞り込んだ（表3）。

表3 南九州市指定文化財「知覧特攻戦没者の手記」一覧

	資料名	戦死年月日	指定の根拠	法量
1	山田勇大尉日記	昭和20年4月8日	4月6日までの日記	16×21、1冊
2	穴澤利夫大尉手紙	昭和20年4月12日	「出撃の日を迎えた」の記載	13×20、4枚
3	中上敬一少尉遺書	昭和20年4月16日	4月15日の日付	18×26、4枚
4	松原徳雄少尉遺筆	昭和20年4月16日	「明日」「最後の離陸」の記載	25×20、1枚
5	上成義徳少尉遺詠	昭和20年4月22日	「出撃前夜」の記載	18×26、1枚
6	網代一大尉遺書	昭和20年4月28日	4月28日の日付	15×21、2枚
7	袴田治夫少尉絶筆	昭和20年5月4日	「モウ出発」の記載	15×21、2枚
8	水川豊少尉絶筆	昭和20年5月11日	「只今より出発」、5月10日の日付	15×21、2枚
9	藤田文六少尉遺書	昭和20年5月25日	「出撃前夜」の記載	16×25、1枚
10	服部武雄少尉遺書	昭和20年5月25日	「明朝出撃」、5月23日の日付	18×25、3枚
11	美野輝雄少尉絶筆	昭和20年5月25日	5月25日午前2時の日付	35×22、1枚、封筒
12	太田巖軍曹絶筆	昭和20年5月26日	「出撃直前」、5月26日の日付	19×14、3枚
13	宮井政信少尉遺書	昭和20年5月28日	「攻撃命令も今日か明日」の記載	18×25、3枚
14	大岩泰雄大尉遺書	昭和20年5月28日	「明朝出撃の予定」、5月26日の日付	15×21、3枚
15	深田末義少尉遺書	昭和20年6月3日	「出発前夜に」、6月2日の日付	18×25、2枚、封筒
16	生駒寛彦大尉遺書	昭和20年6月6日	「明日征きます」「出撃前夜」の記載	40×30、1枚
17	中嶋璋夫少尉遺書	昭和20年6月6日	「任務に赴く前夜」の記載	64×32、1枚
18	和田照次大尉遺書	昭和20年6月6日	「今日（中略）出撃」、6月6日の日付	15×20、3枚

(2) 各資料の選定事由

資料1「山田勇大尉日記」は、昭和二十年四月八日に特攻戦死した山田勇大尉（戦死後の階級。以下同じ）が、四月六日までつけていた日記で、冊子である。四月五日の日記には、「知覧井に前進一泊 軍司令官閣下の激励の訓示あり」「我々の命令も明日一日なり」とあり、出撃前夜の心境で記されたことがわかる。実際には、六日の日記にあるように「出発時刻ニ全機故障止ムナク出発ハ明日トナリ」、さらに一日延期されて、八日に攻撃している（写真1・3）。

資料2「穴澤利夫大尉手紙」は、昭和二十年四月十二日に特攻戦死した穴澤利夫大尉が婚約者にあてた最後の手紙である。便箋四枚からなるが、手紙の受け取った婚約者により別な用紙に貼り付けてファイリングされて大事に保管されてきたものである。「晴れの出撃の日を迎へたのである」「当地は既に桜も散り果てた」という文言から、出撃直前に知覧において記されたと推測することができる（写真4・5）。

資料3「中上敬一少尉遺書」は、昭和二十年四月十六日に特攻戦死した中上敬一少尉の遺書である。便箋四枚からなり、家族への他の手紙や絶筆などと冊子状にして綴られて保管されてきたものである。「四月十五日の夜」と記載があることから、出撃前夜に記されたことがわかる（写真6・9）。

資料4「松原徳雄少尉遺筆」は、四月十六日に特攻戦死した松原徳雄少尉の遺筆である。一枚の白紙（色調の意ではなく、便箋や原稿用紙ではない紙という意）両面に墨書されている。「明日十二時迄に最後の離陸をします」という文言から、出撃前日に記されたことがわかる（写真10・11）。

資料5「上成義徳少尉遺詠」は、昭和二十年四月二十二日に特攻戦死した上成義徳少尉の遺詠である。一枚の便箋に墨書されている。

「出撃前夜」という文言から、出撃前日に知覧において記されたと推測した。日付の記載がないため、前線基地である知覧飛行場へ赴く際に、その前夜に記された可能性も残るが、「出撃」という文言を、最終離陸の意味であると解釈した（写真12）。

資料6「網代一大尉遺書」は、昭和二十年四月二十八日に特攻戦死した網代一大尉の遺書で、便箋二枚からなる。「愈々出発デス」という文言や、「四月二十八日」の日付から、出撃当日に記されたことがわかる（写真13）。

資料7「袴田治夫少尉絶筆」は、昭和二十年五月四日に特攻戦死した袴田治夫少尉の絶筆で、便箋二枚両面に記されている。「既ニ我が愛機ハ（中略）爆音ヲ立テテリマス」「モウ出発デアリマス」という文言から、出撃直前に知覧飛行場で記されたことがわかる。「今翼ノ上デ走り書キヲシテリマス」という文言から、飛び立つ直前まで飛行機の翼の上で書いていたことがうかがえる（写真14）。

資料8「水川豊少尉絶筆」は、昭和二十年五月十一日に特攻戦死した水川豊少尉の絶筆で便箋2枚からなる。「只今より出發致します」という文言と、「五月十日」の日付から、出撃前日に記されたことがわかる。指定を検討していた当時、「小月にて」という文字を判別できておらず、日付から知覧飛行場にて記されたと推測していた。しかし、「小月にて」という記載から、小月飛行場において記されたと判断することができるため、今後、再検討する必要がある（写真15）。

資料9「藤田文六少尉遺書」は、昭和二十年五月二十五日に特攻戦死した藤田文六少尉の遺書で、原稿用紙一枚からなる。「出撃前夜」という文言から、出撃前日に記されたと推測した（写真16・17）。

資料10「服部武雄少尉遺書」は、昭和二十年五月二十五日に特攻戦死した服部武雄少尉の遺書で、原稿用紙三枚からなる。「明朝は

表4 手記資料の用紙と筆記具の種類

	用紙	筆記具
1	冊子、ハードカバー	万年筆か？
2	便箋（茶色罫線）	万年筆か？
3	便箋（黒色罫線）	墨
4	白紙	墨
5	便箋（青色罫線）	墨
6	便箋（青色罫線）	万年筆か？
7	便箋（赤色罫線）	万年筆か？
8	便箋（黒色罫線）	インク
9	原稿用紙「大日本…」	鉛筆
10	原稿用紙「大日本…」	鉛筆
11	白紙	墨
12	白紙	鉛筆
13	便箋（青色罫線）	万年筆か？
14	便箋（緑色罫線）	赤鉛筆、青鉛筆
15	便箋（赤色罫線）	鉛筆
16	白紙	墨
17	白紙	墨
18	便箋（黒色罫線）	鉛筆

出撃せんと待機して居ります」「愈々明日は総攻撃です」「知覧にて」という文言や、「五月二十三日」の日付から、出撃直前に記されたことがわかる。藤田少尉と服部少尉の遺書は、「大日本雄辯會講談社原稿用紙」と定形印刷された同じ紙が用いられている（写真18）。

資料11「美野輝雄少尉絶筆」は、昭和二十年五月二十五日に特攻戦死した美野輝雄少尉の絶筆で、原稿用紙一枚からなる。「五月二十五日午前二時」「出撃ハ後時間の問題」という文言から、出撃当日の夜中に記されたことがわかる（写真19）。

資料12「太田巖軍曹絶筆」は、昭和二十年五月二十六日に戦死した太田巖軍曹の絶筆で、三枚の白紙に鉛筆で記されている。「出撃時刻デス征キマス」、「出撃直前デアリマス故充分書ク事出来マセン」、「只今ヨリ征キマス」という文言と「五月二十六日」の日付から、知覧飛行場で出撃直前に記されたことがわかる（写真20）。

資料13「宮井政信少尉遺書」は、昭和二十年五月二十八日に特攻戦死した宮井政信少尉の遺書で、便箋三枚からなる。「最後の出撃

に前進命令を受け九州の最南端〇〇基地に前進ス」とあり、三角兵舎の様子も描写されている。「愈々私達の攻撃命令も今日か明日」という文言から、出撃直前に記されたことがわかる（写真21）。

資料14「大岩泰雄大尉遺書」は、五月二十八日に特攻戦死した大岩泰雄大尉の遺書で、便箋三枚からなり青鉛筆と赤鉛筆で記されている。「明朝出撃ノ予定」という文言から、出撃前日に記されたことがわかる（写真22）。

資料15「深田末義少尉遺書」は、昭和二十年六月三日に特攻戦死した深田末義少尉の遺書で、便箋二枚からなり、鉛筆で記されている。「明日は愈々晴れの出撃なり」「出発前夜に」という文言や、六月二日の日付から、出撃前夜に記されたことがわかる。「明日出撃の特攻勇士はとても朗らかなり」「レコードを掛けたり唄を歌ったりして居ります」の記述は、出撃前夜の様子を伝える一事例である。南九州市教育委員会が行った三角兵舎跡の発掘調査では、実際にレコードの破片が出土している（写真23）。

資料16「生駒寛彦大尉遺書」は、昭和二十年六月六日に特攻戦死した生駒寛彦大尉の遺書で、白紙一枚に墨書されている。「出撃命令下り寛彦はいよいよ明日征きます」「出撃前夜」の文言から、出撃前夜に記されたことがわかる（写真24）。

資料17「中嶋璋夫少尉遺書」は、同じく六月六日に特攻戦死した中嶋璋夫少尉の遺書で、白紙一枚に墨書されている。「大命ヲ拜シ任務ニ赴ク前夜一筆父母ニ記ス」という文言から、出撃前夜に記されたことがわかる（写真25）。

資料18「和田照次大尉遺書」は、同じく六月六日に特攻戦死した和田照次大尉の遺書で、便箋三枚に鉛筆で記されている。「今日私は特別攻撃隊員として出撃致します」の記述や、「六月六日」の日付から出撃当日に記されたことがわかる（写真26）。

3. 指定資料の資料的価値

以下、指定書より引用する。

「指定書

- | | | | |
|---|--------|---|-----|
| 1 | 名称及び員数 | 知覧特攻戦没者の手記 | 18点 |
| 2 | 特徴 | 知覧から出撃した特攻戦没者が、出撃命令を受けた後、出撃直前の前日から当日前にかけて書いた手記。 | |

て書いた手記。

第二次世界大戦末期の沖縄戦において、知覧から出撃した陸軍特別攻撃隊隊員が、出撃命令を受けた後に、出撃直前の前日から当日前にかけて家族へ宛てて記した遺書・遺筆・絶筆・遺詠・辞世・日記・手紙・葉書などの手記資料。

本資料群は、我が国の昭和史における特攻の史実を伝え、特攻隊員が、知覧の三角兵舎や飛行場内で死期が迫る中、どのような言葉を最後に残したのかを知る上で重要な歴史資料である。

南九州市文化財保護条例第4条の規定に基づき、南九州市指定有形文化財（美術工芸品・歴史資料）に指定する。

平成27年7月21日

南九州市教育委員会

指定書に記されたように、資料的価値は「知覧の三角兵舎や飛行場内で死期が迫る中、どのような言葉を最後に残したのか」という点である。この視点は、陸軍士官学校などでは遺書や辞世の模範例を教えていたことなどから、必ずしも本人の文章とはいえないという見方に対するアンチテーゼとして、「もし状況および記者にかなう情報を手がかりとして「白い行間」を読むことができるのなら、そこに潜む真情にふれることは可能であろう（森岡一九九一・十九

頁。）」という森岡氏の主張とも合致する。

4 指定資料

（1）資料1 山田勇大尉日記

（前略）

昭和二十年

三月廿六日

二十三日附 秘命令にテ待望の大命降下血湧き肉躍る必ず成功を期す

二十七日

四ヶ月振にて単発機に搭乗感じを忘れて居たので困った

二十八日

小隊教練
拾時師団長閣下以下師団全員に見送られて勇躍出発

三十日

感激の一瞬

四機を残して八機士気旺盛

相模に不時着天龍にて補給加古川に一泊

夜懷しの父母と三名枕を並べし一の床に休む

思ひ出のそして最後の一夜あり

安心しきった爲か安らかに眠る

天候不良 長機故障の爲め出発延期父母と

半日飛行場にありて話す

話しは山程あれど語る事出来ず又余り話す

要なし

特攻隊に行く事は知って居る事と思ふ

自分の飛行振りを見て安心した事と思ふ

16515大阪行の列車にて帰る母は自分の出発

を見送ったかったらしいが家で子供が出来る事

四月一日

だし随分心残りの事と思ふ
列車の出る瞬間の母の姿
すっかりやっておくれ
唯それだけの言葉がしっかりと胸に脳裡に
刻みつけられた

芦屋井着

旅館宿泊3泊

特攻隊給与でばんとしてゐたが食べられず
めんちょうの為なり

愈々進発命令来る

五日

八、三五全機離陸 知覧井に前進一泊軍司令官

閣下の激励の訓示あり 概着部隊は一機又

一機進発す

吾々の命も明日一日なり

◎あられふるやだまのふすま

かいくゞり

進む若鷺大君の為め

何も云ひ残す事もなし 心残りなし

唯大君の御為めに喜んで悠久の大儀に生きん

七生報国

米英撃滅に邁進せむ

◎大君のみ為めに死ねと云ひし母強し

吾れ必ずや一艦轟沈せむ

六日夕刻二十三才の若輩にして三千名を屠る

必中

轟沈

第六十八振武隊

出発時刻ニ全機故障止ムナク出発ハ明日

トナル整備不良の為メナリ明日ハドンナ事ガアッ

テモ出発セザルベカラズ菊水第一号ニハ参加シ

ナケレバナラヌ

轟沈

第六十八振武隊

轟沈

七生報国

(2) 資料2 穴澤利夫大尉手紙

【1枚目】

二人で力を合せて努めて来たが 終に実を結
ばずに終った 希望を持ち乍らも 心の一隅で
あんなにも恐れていた”時期を失する。”と言ふこと
が実現して了ったのである 去月十日 楽しみ

の日を胸に描き乍ら 池袋の駅で別れてあつた
のだが 帰隊直後 我が隊を直接取り巻く

状況は急転した 発信は当分禁止された
(勿論今は解除) 転々と処を変へつつ多忙の

毎日を送った そして今 晴れの出撃の日を
迎へたのである 便りを書き度い 書くことは

うんとある 然しそのどれもが今までのあなたの
厚情にお礼を言ふ言葉以外の何物でもない

ことを知る あなたの御両親様 兄様 姉様

【2枚目】

妹様 弟様 みんないい人でした 至らぬ自分に
かけて下さった御親切 全く月並のお礼の言葉

では済み切れぬけれど「ありがたふ御座いました」と
最期の純一なる心底から言って置きます

今は徒に過去に於ける長い交際のあとをたどり
度くない 問題は今後にあるのだから 常に
正しい判断をあなたの頭脳は与へて進ませて
呉れることと信ずる 然し それとは別個に
婚約をしてあつた男性として 散つて行く男子として
女性であるあなたに少し言つて征き度い

「あなたの幸せを希ふ以外に何物もない

「徒に過去の小義に拘る勿れ あなたは

過去に生きるのではない

【3枚目】

「勇気を持つて過去を忘れ 将来に新活面を

見出すこと。

「あなたは 今後の一時一時の現実の中に

生きるのだ 穴澤は現実の世界には もう

存在しない

極めて抽象的に流れたかもしれぬが 将来生起

する具体的な場面々に活かして呉れる様

自分勝手な 一方的な言葉ではない積りである

純客観的な立場に立つて言ふのである

当地は既に櫻も散り果てた 大好きな嫩葉の

候が此処へは直きに訪れることだらう

今更何を言ふか、と自分でも、考へるが ちよつぱり

慾を言つて見たい

【4枚目】

一、読み度い本 「万葉」「句集」「道程」「一点鐘」

「故郷」

二、観たい画 ラファエル「聖母子像」 芳崖「悲母観音」

三、智恵子 会ひ度い、話し度い、無性に

今後は明るく朗かに。

自分に負けずに、朗らかに笑つて征く

利夫

智恵子様

(3) 資料3 中上敬一少尉遺書

【1枚目】

謹啓 父様 御婆様 其の後元気で御

送日されてゐられますか 小生敬一も以来

頗る元気に而も愉快なる日を送つて

居ります。安心下さい 父様 婆様 敬一

の命を捧ぐる日は参りました 墨染

の散る櫻の如く 沖縄の雲むす屍

となり日は今です。 神州の戦争

生か滅かは此の南西の海上に於て決

すると信じて居ります 敬一は其の

礎として陸軍特別攻撃隊の一員として

初陣致します 大日本 断じて勝つを

信じ又 必ず一機一艦に命中するの

決意です 我等の同志は今日も又明日も

隼の音勇ましく日ノ本の国を立て

【2枚目】

征きます 誰の顔に命の 欲しいと云ふ顔は

爪の垢程もない只笑って離陸してゐた
我等同志の様 筆舌に盡くし難きもの
があります 櫻の花を愛機に飾り飛立つ
空の勇士特攻隊 再び帰らぬ神機 我も
斯く成る心は有ります 笑って征く
沖繩の海へ

身はたとへ 南西の空に くちくとも

永久に 生きなん わか櫻

神州神ながらの 国 日の本 断じて勝たん
我等が特攻隊 隼は今も尚南の雲に消へて
征く……

父様 御婆様 母亡き子の敬一を良く之迄
仕立ててくれました 厚く御礼申上ます

【3枚目】

未だ孝行は何一つした事なく 又 老ひたる父様より
先に 母の許に静まります どうか御許し
下さい 近所の人によろしく傳へて下さい
敬一が帰省したのも特別攻撃隊と知つての
行動で有ります。まくならぬ身 一言あの
時云ひたかったのです 而し 云はれぬ敬一の胸の内
察して下さい 又、色々と近所の人恩師に便
したいのですが時がありません どうかよろしく
傳へて下さい くれぐれも達者で暮らされん
ことを波間より祈ります。 終りにどうか
愛弟姪をして立派に国に立つ飛行士に
して下さい 最後の御願です。

散りて後 青葉茂れる

若か櫻 敬一 作

【4枚目】

敬一の心は

徹 忠

の二字であります

敬一より

父上様

四月十五日の夜

(4) 資料4 松原徳雄少尉遺筆

【1枚目】

オ父上 御身体大切ニ

母上

今一度御顔ヲ見タイ

ト思ヒマスガ合ヘバ

返ヘツテ悪イト思ヒ候ハ

必ず敵空母ヲ

轟沈致シマス

【2枚目】

一、此の航空セーターハ

出発の前日迄

着タルモノナリ

一、手袋ハ

飛行機ニ乗ル時ニ

使用スルモノデス

此レハ飛行機ニ飛ル時

ギズヲシタ時使用

スルモノデス

明日十二時迄最后ノ

離陸ヲシマス

(5) 資料5 上成義徳少尉遺詠

【1枚目】

意氣軒昂

君が為め

雄々しく散らん

櫻花

出撃前夜

第八十振武隊

上成曹長

(6) 資料6 網代一大尉遺書

【1枚目】

其后御壯健ニテ御過シノコトト拝察致シマス

一モ元氣デ軍務ニ精勵シテ居リマス故他事乍ラ

御安心下サイ此度ハカラズモ大命ヲ拝シ特別

攻撃隊員ノ一員ニ選バレマシタ身ノ光榮ト感泣

致シ居ル次第デス二十有余年間慈ミ下サレシ御

恩ノ万分ノ一モオ報シ出来ズ先立ツ不幸幾重ニ

モオ詫ビ申上ゲマス

父上ノ方ニモ御便り致シマシタ健治ノ住所忘レマシ

タ故出シマセン母上ノ方ヨリヨロシク御知ラセ下サイ
香谷ノ皆様ニヨロシク

愈々出撃デス必ズ必ズ大物ヲ轟沈致シマス

戦果御待チ下サイ。

デハ御先ニ征ッテ待ッテ居リマス母上ニオカレマシテ

【2枚目】

モ呉々モゴ健康ニ御留意ノ上御健斗祈リ

マス最后ニ辞世ト云ッテ変デスガ左ニ記シマス

大君の御楯と散って

かへり見ぬ

大和男子の花ぞ香ぐはし

昭和二十年四月二十八日

母上様

一より

(7) 資料7 袴田治夫少尉絶筆

【1枚目】

絶筆

度々最後々々ト書キマシタガ今度コソ最後デアリマス。

男ト生レ愛機ト運命ヲ共ニシテ、敵艦ニ突入出来得ル

コトヲ無上ノ光榮ト致シマス。三年間ノ教エ有難ウ

御座イマシタ。治夫ガ特別攻撃隊トシテ征クコトノ出来得ル

ノモ皆オ父サンオ母サンノ御陰デアリマス。治夫ハニッコリ

笑ッテ死ンデユキマス 天皇陛下ノ爲ニ、アノ憎イ

米鬼ヲ三途ノ土産物ニシテオ母サン泣キタカッタラ、

泣イッテ下サイ。治夫ハアメリカノ五千人余リノ母ヲ泣カセ

【2枚目】

ルノデス 既ニ我が愛機ハ今日ノ体當リヲシユクスル如ク

物スゴイ爆音ヲ立テテヲリマス。モウ出発デアリマス。
アト十分位シカアリマセン。デハ隊長殿ニ報告シテマイリマス。
報告モ、終エマシタ。イヨイヨ愛機ニ搭乗デアリマス。

今翼ノ上デ走り書キヲシテヲリマス。スデニ、戦友ハ飛行
機ニ乗ッテラル。デハ自分モ搭乗シマス。サヨウナラ。
オ母サン、オ父サン、トコシエニサヨウナラ。

天皇陛下萬歳

懷シキ我子愛機ノ翼ノ上デ

治夫 ●

【1枚目裏】

鹿児島県川辺郡知覧町霜出

辻静子様

右ノ家ニ知覧在隊中色々御厄介ニナリマシタカラ

御礼状ヲ出シテ下サレ度

右宅ニ自分ノ寫眞ヲ一枚是非送ラレタシ 治夫

【2枚目裏】

陸軍特別攻撃隊

第五降魔隊（白虎隊）

袴田伍長

（8）資料8 水川豊少尉遺書

【1枚目】

只今より出發致します 二十年の永い間色々
心配をお掛け致しました厚く恩禮申上ます。今の
今迄一度と安心させることが出来ませんでした、今度
こそはそれに報ひを致す覚悟です。

今初めて男と生れた最大の喜びを感じました。喜ん
で下さい。出撃の暁は必殺轟沈以て醜敵を滅し

て皇基を守ります。そして孝行を致します。
嗚呼何といふ今日は良い日だろう。戦果が待た
れる。

若櫻

散ると誓ひし我が身なり

育てし親の今日ぞ尊し

【2枚目】

豊が死んだ後も樂して御暮し下さい
同封の金は所持金で必要なため送りました。適時間に
有益に御使用下さい

左様奈良

小月にて

豊より

御両親様へ

五月十日

（9）資料9 藤田文六少尉遺書

【1枚目】

お母さま

五月二十五日

元氣澁刺として憎き米英空母戦艦必ずつく
轟沈致しに出撃致します。

心は正しく清く朗らかであります。につこりと
笑って敵艦に体当り致します。

お母さま文六の今迄の不孝お許し下さい。

お母さまの永々の御健康と幸福をお祈り致し
ます。長らくお世話になりました。

南海に敵艦求めて直しぐら

出撃前夜

文六より

お母さまへ

(10) 資料10 服部武雄少尉遺書

【1枚目】

御両親様御元氣ですか。武雄も元氣旺盛明朝は出撃せんと待機して居ります。

度々の度り、重複する様な事が何度もあると思ひますが、最後々々と思つた日が、今日迄續いたのです。愈々明日は總攻撃です。

今となりて何も言ふ事はありません。

唯御両親様の健康を祈つて居るのみであります。

知覧にて名古屋から歸つた人の話を聞いたのですが、熱田神宮名古屋城天守閣は焼けてしま

【2枚目】

つたとの事さぞかし我家も焼けてしまった事でせう。此の仇は此の武雄が討つて見せます。

私の遺品是有松の叔母様の家に送ります。

使へる物が有つたら使つて下さい。

兄さん達にもよろしくお傳へ下さい。

姉さん後の事はよろしく願います。

知覧にて正木町の中川鉄工所(本町通り本屋裏)の中川

少尉殿に会ひまして此の手紙をあつらへた次第です。

中川鉄工所は自分の小学校時代の

同級生が居ります。

守も強く育て、下さい。國男君はもう入營され

【3枚目】

たでせうか。林成雄君にもよろしく傳へて下さい。

貞二、光男大きくなり立派な軍人になってくれよ、空襲など、なにくそとはね飛ばし頑張つて下さい。

親類の家にまだ便がだしてない故 家よりよろしく傳へて下さい。

御両親様一同も元氣で暮されます様に、健康を祈つて居ります。

さようなら

五月二十三日

(11) 資料11 美野輝雄少尉

【1枚目】

父上様 母上様

日々お元氣のこと、存じます。

武運にめぐまれ 第八次總攻撃

二十五日の朝、沖繩の艦船になぐりこみを実施します。

勿論 人生はこれ迄でせう

何卒御両親に於いても元氣

にて日々お励み下され

勝利の日まで

勉

のことはくれぐれもたのみ

ます

必で一文字体当り敵艦を

轟沈せん

輝雄

五月二十五日午前二時

出撃ハ後時間の問題

御両親様

(12) 資料12 太田巖少尉遺書

【1枚目】

父上母上様 世ニ生ヲ受ケテ十九有年
御愛育ノ限リナキヲ深謝致シマス
コノ度ノ光榮極リナキ大任ハ必ズ完遂致シ
マス 敵撃滅ヲ期シ御恩ノ万分ノ一二モ答
ヘント思マス 唯何一ツ孝養ヲ盡ス事出来
マセンデシタノガ實ニ残念デス 然シコノ私ノ
征途ハオ喜ビ下サイ。本ヨリ私ハ陛下ノ
赤子還ラストモ絶対私情ニ依リ悲シムガ
如キナキ様 航空武人ハ一度大空ヲ翔
破致シマスレバ散ルハ當然ノ事寧ロコノ任務
ヲ褒メテヤッテ下サイ。神州ハ必勝デス
孝養ヲ盡ス事能ハズオ先ニ失礼致シマスルノガ
オ詫デアリマス 間野中尉殿ヨリ死ヌ時ハ
笑ッテ死セト教ヘラレマシタ巖ハ莞爾ト笑ッテ
散リマス。兄弟姉妹ノ事ハ宜シク申上マス
折角御自愛專一二御長壽ヲ全ウ下サレ度
出撃時刻デス征キマス。オ達者デ

サヨナラ

【2枚目】

兄上様 姉上様 長イ間色々有難ウ
御座居マシタ 今迄ノ御恩ハ必沈ヲ期シ
報イマス。ドウゾ 弟妹ヲ大事ニ父上母上ヲ
助ケテ下サイ。

その子、光江 智 澄子へ。

良ク兄サント仲良ク遊ンダネ。その子モ
生産方面ニ活躍ノ事一生懸命頑張り給へ、
光江、智ハ良クオ父サンオ母サンノ教ヲ
守リ一生懸命勉強シ立派ナ少國民ニナリ
ナサイ 兄サンハ皆ノ偉ラクナルノヲ待ッテ居ルヨ。
澄子ノ顔ヲ兄サンハ良ク知ラナイガ澄子モ大キクナッタ
ナラバ立派ナ日本婦道ノ道ヲ踏ミナサイ
兄サンガ居ナイトテ絶対、悲シンデハナリマセン
兄サンハ何時モ皆ノ處ニ居ルヨ。

景三へ、

オ前ハ良ク兄ト力ヲ協セタナ オ前ハ實ニ可愛ク
兄ハ信ジテ居ル 必ズ君ガ立派ナ軍人トナリ皇國ニ
盡ス事ヲ兄ハ一足オ先ニ失礼スルガ御両親様
ヲ良ク助ケ兄弟姉妹ト協力シ奮斗サレ度シ
靖國デ又合ハウ 元氣デ勉学ニ精出セ。

【3枚目】

石井、坂田先生ニ宜敷シク
大庭由三様一家 初江様ニ 宜敷シク
後藤兼作様ニ宜敷シク
親類各位 近所ノ人達ニ宜敷シク。

村長様、友治殿、岩井章殿ニ宜敷シク
出撃直前デアリマス故充分書ク事出来マ
セン 許シテ下サイ。

轟沈

只今ヨリ征キマス

巖

父上母上様

昭和二十年五月二十六日

(13) 資料13 宮井政信少尉遺書

【1枚目】

之が最後の便りです

五月十八日愈々沖繩作戦に参加すべく前進命令を受け
中国の〇〇基地に出發致しました 此の日若干天候曇り

勝なり午前十一時飛行場に整列軍官民多数の見

送りを受け女子青年団より血染の鉢巻を戴き、女学

生より花束を受け婦人會より人形を受け十三時

三十分勇躍松戸基地にと出發、堂々と猛鷲は最後の

別れの翼を振りつつ新基地に向って航進始めました

十六時半頃 全機無事基地に到着せり

途中大阪の柏原の上空を飛ぶ時懐かしく翼を振

りて前進せり

点々と緑の小島の浮ぶ瀬戸内海景色を眺めつつ隊員

一同出撃を日を待機せり

【2枚目】

宿舎は營外にて山の中の温泉旅館なり

滞在間神戸製鋼等に慰問を受けたし 小学生の

慰問を受けたりして或は「ピンポン」玉突等にて
愉快に過して居りました

五月廿五日愈々最後の出撃の前進命令を受け九州
の最南端〇〇基地に前進ス さすが内地の南の端
の故か暑い。宿舎廠内なれど山の仲にてこんもりと
繁った檜林の仲にて兵舎は三角兵舎なり

蟬の鳴声賑やはしく、眞夏の気分が出ます

兵舎の仲は穴倉の様です。来て見れば特攻機は、

瀆々として待機して居ります 御安心下さい

今朝(25日)も第七次總攻撃が開始され堂々と沖繩に
向って進發して行きます。

【3枚目】

新聞等にも出て居る如く他の隊員も自信満々と

して居ります 之が今日と解らぬ命の若者の気持

かと思義に思はれます

毎日沖繩の決戦場に向って特攻機は次から〜と

攻撃に向って居ります

愈々私達の攻撃命令も今日か明日(廿六〜廿七日)かに迫って

居ります 義烈空挺隊強行着陸するも未だ〜

沖繩の決戦緊迫と告げて居ります

満心たるにしかず我々の双肩實に重大なり

必ず成功して見せます 御待ちして下さい

今晚も特攻機は月明の仲を出撃して行きます

では之にて筆を置きます

五月廿六日二十二時書

母上様

政信

(14) 資料14 大岩泰雄大尉遺書

【1枚目】

明朝出撃ノ予定

今更ニ父上母上ノ御恩ニ深く感謝シ今

我二年ナルカナ悠久ノ大義ニ生キントス

操縦尚浅キ我等ニシテ第一線精鋭

機ヲ以テ出撃シ得ルハ身ニ余ル光荣

ニシテ潔ク敵撃滅ノ信念ニ燃エ七生

報國必ズヤ神州ヲ護ラン

御送りセシ物スベテ 父上ニテ如何様ニモ取

【2枚目】

計ヒ下サレ、バ幸甚ナリ。

東京ノ伯父様、近江ノ叔母様ハジメ皆

様ニ宜敷ク御傳ヘ下サイ。

一同ノ中ニハ鷺尾ハジメ奮キ戦友

ク皆元氣旺盛必勝ノ信念ニ燃エテ

居リマス

人生二十三年其間色々ナ人々ニ愛サ

レ又愛シ来リタル面白キ過程ナリ

【3枚目】

簡単ナガラ之ニテ

クレグレモ御健康ヲ祈リマス

すめらみの

たまもる国の

人はしら

父上様

泰雄

母上様

(15) 資料15 深田末義少尉遺書

【1枚目】

戦局益々重大ナリ 我れ祖国日本の爲選ばれて第二一四振

武隊として沖縄決戦場へ突撃せんとす 必中轟沈を期す

我死すと雖も悠久の大義に生きん

此の便りを見らる、時は我既に体當を敢行し終れり沖縄に

憎敵米艦んと米兵を海底の藻屑に葬らん

我れを見んと慾すれば南海に煌めく明星を見よ誓つて

祖国日本を護らん

父母様姉様には小生の気持を察せられ絶対に取乱すと云ふ事

のない様にお願ひ致します いづれ公報がある事と思ひますから

御承知の程それまでは心にだけ思つて居て下さい 其の内に小生出

撃の寫眞及遺書が送ってくる筈張切った姿を見て下さい 義助

兄さんもほめてくれる事と思ひます

此の便りも機付に頼みます

父母様、姉様の健康を祈ります

明日出撃の特攻勇士はとても朗らかなり レコードを掛けたり

【2枚目】

唄を歌つたりして居ります

明日は愈々晴れの出撃なり 之にてペンを置く

六月二日 出発前夜に

末義拜

父母様姉様

追伸

兄玉、近所の人に宜敷く伝えて下さい

いづれ四日か五日の新聞に明日の戦果及戦況が出る筈、六月三日午前十時出発（離陸）

凡そ午後一時頃突入する予定（沖縄嘉手納湾）

貯金帳と金を送った筈受取って下さい

茲一月か二月位の内に航空軍司令官中将より訓示を受けて居る所が日本ニュースに出る筈亦出撃の時の状況も出るから氣を付けて見てもし小生を見付けたら

その事を云つたら寫眞をくれる筈、約五十人くらい並んで居る第二列の中央位に居る筈

(16) 資料16 生駒寛彦大尉遺書

【1枚目】

父上様

母上様

出撃命令下り寛彦ハ いよく明日征きます

世界無比の皇国に生を享け 日本一の

御両親様を持つ寛彦ハ 正幸兄の志をついで

大空で御奉公出来た事に無限の喜びを抱き

明日の轟沈行に臨みます 父上の御訓を

体しお母様のお言葉のやうに必ず任務完遂

の覚悟であります 今更 言なし 寛彦敢行

の報至れば 必ず国旗を立て、祝つて下さい

遺品の処分ハ御両親様のおよろしいように唯

後に続く者をお願いします

御両親様充分御自愛ありて 天寿を全うして

下さい 雅俊君 道生君 立派な軍人となり

お父様の志をついで下さい

正位兄さん 会わずに残念でした 醜敵必ず

撃滅します すが子姉さん たつゑ姉さん

文子姉さん 私に代つて 御両親様のお世話願ひ

ます 皆様お元気で

でハ きます。

出撃前夜

寛彦

(17) 資料17 中嶋璋夫少尉遺書

【1枚目】

前略

今般大命ヲ拝シ任務ニ赴カントスルニアタリ暑

中ニ熱氣ヲ思ヒ寒中ニ身ノ安危ヲト陰ニ陽ニ

氣ヲツカハレシ父母上様ニ何等未ダ以テナスコトナ

ク餘生ヲ送りシ事不肖璋夫帝國ノ操縦者ト

シテ特ニ軍人トシ恥入ル次第ナリ サレゾ選バレテ

国家存亡ノ境ニ立チ厥然基地ヲ離レ雄躍任ニ

向ヒ業ナラズンバ死ストモ歸ラヌノ一念ノ下斃レテ後

尚止マザルノ意ヲ体シ敵米英艦撃滅ニ邁進

スル事ヲ得マシタ事ハ璋夫ガ幼少ノ頃ヨリ戯レニ

踊リ狂ウテ居リシ頃ヨリ宿望セシ所ナリ

今ニシテ斯様ノ任果サバ今迄何等成事ナク不

忠不孝と重重も、多少ナリト報恩ナルヲ思ヒ

一死以テ任務ニ為サント決心致シ居ルモノナリ併ナガラ

戦局ヲ直視スルニ此度ノ鴻業輕シトセズ生キテ再ビ

父母ニ會フ氣寸毛ナシ璋夫命長ラクバ大東亜

戦争長ビキ命櫻花蘭滿タル四月ノ宵散行ク

如ク散ラバ何ゾ米英遺滅意トスルニ足ラント勇躍

神佛ニ念ジ任務達成セバ在世ノ不孝ヲ多少ナリ

ト許シ下サレ度聊カ親孝行ノ眞似事ニカヘ璋夫

本望トスル所ナリ 大東亜戦争ノ完勝モ早目前

ニ迫リヌ 父上母上様ニハ体ニ充分注意ナラレテ益々

銃后ノ務ニ精進サレル様又妹ヨ兄ニ代リテ年老イ
征ク両親ニ益々孝養サレン事ヲ洋上遠隔ノ地ヨ
リ祈ルノミ

大命ヲ拜シ任務ニ赴ク前夜一筆父母ニ記ス

天劔隊

父上様

母上

璋夫ヨリ

(18) 資料18 和田照次大尉遺書

【1枚目】

お父さん

お母さん

お元気ですか。

今日私は特別攻撃隊員として出撃致します。

こゝ知覧は昨年八月より十一月まで居った所丈に一木一草みな懐かしく思はれます。

隊員を命ぜられてから今日に至るまで無事任務を完遂出来る事のみを念じて居りました。

出撃の時は来しました。今は只管神明の加護を念じて居ります。

酔生夢生の人生、無為の人生、といった人生の多い内に敵艦必沈と言ふ大きな究極の目的を以て閉ずる私の人生は神々に祝福されたものと思ひます。

【2枚目】

小さい時から肉親兄妹の溢れるばかりの愛情の内

に育くまれた私は本当に幸福でありました。

私の希望、或は我儘をみなき、届けて下さった

私の人生は誰よりも幸福であり充実されたものでした。それに引換 私が生子として御両親に何等報ゆる処なくして征くを非常に遺憾と致します

昨年の七月以降遂にお目にかゝる機会はありませんでした。然しあの時 夏の清々しい夕べ 明るい燈の下で皆様と楽しくお話した時の事はいつも忘れませんでした

私が居なくなってもみんな元気でお父さんは外でお働きになる お母さんは内の仕事をおやりになる けさ江やふき江ともえはすこやかに大きくなって

【3枚目】

幸福な家庭を持つ様になる

そして皆が明るく 楽しく 扶けあつて美しい生活を営む 私はそれを希い それを祈つて居ります

出撃前で 時間がありません

私の心は 如何にしても この大業を完遂する事とみな様の 御元気であるを願ふ事です

では 御機嫌よう

さようなら

照次

皆様へ

六月六日



写真1 資料1 山田勇大尉日記①



写真2 資料1 山田勇大尉日記②



写真3 資料1 山田勇大尉日記③



写真4 資料2穴澤利夫大尉手紙①（1枚目・2枚目）

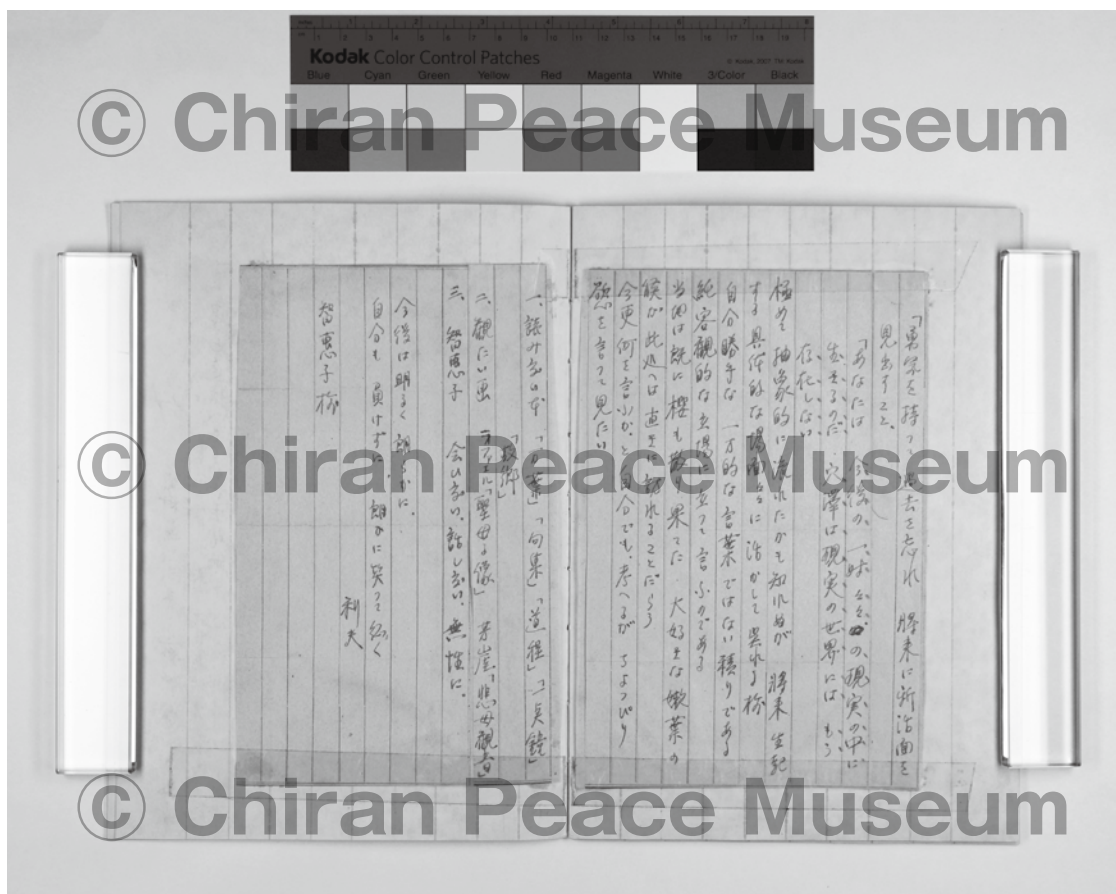


写真5 資料2穴澤利夫大尉手紙②（3枚目・4枚目）

写真6 資料3中上敬一少尉遺書①（1枚目）



写真7 資料3中上敬一少尉遺書②（2枚目）



写真8 資料3中上敬一少尉遺書③（3枚目）

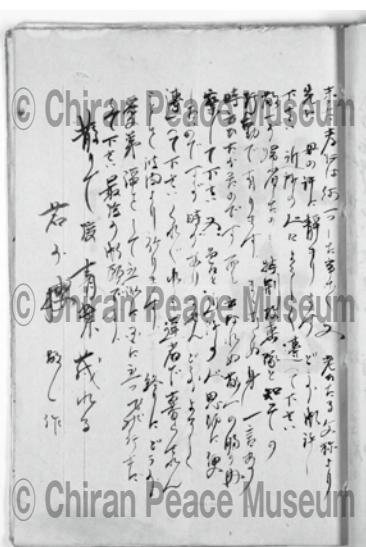


写真9 資料3中上敬一少尉遺書④（4枚目）





写真10 資料4 松原徳雄少尉遺筆①（表面）

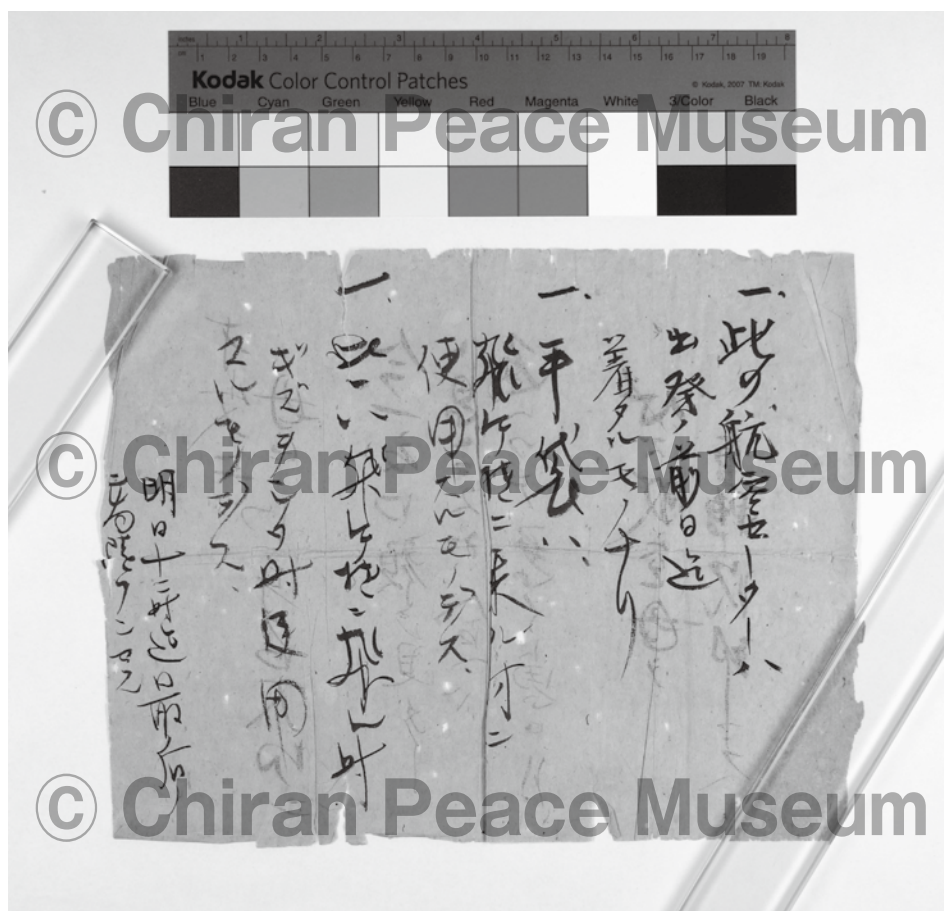


写真11 資料4 松原徳雄少尉遺筆②（裏面）



写真12 資料5上成義徳少尉遺詠



写真13 資料6網代一大尉遺書

写真14
資料7 袴田治夫少尉絶筆



写真15
資料8 水川豊少尉絶筆

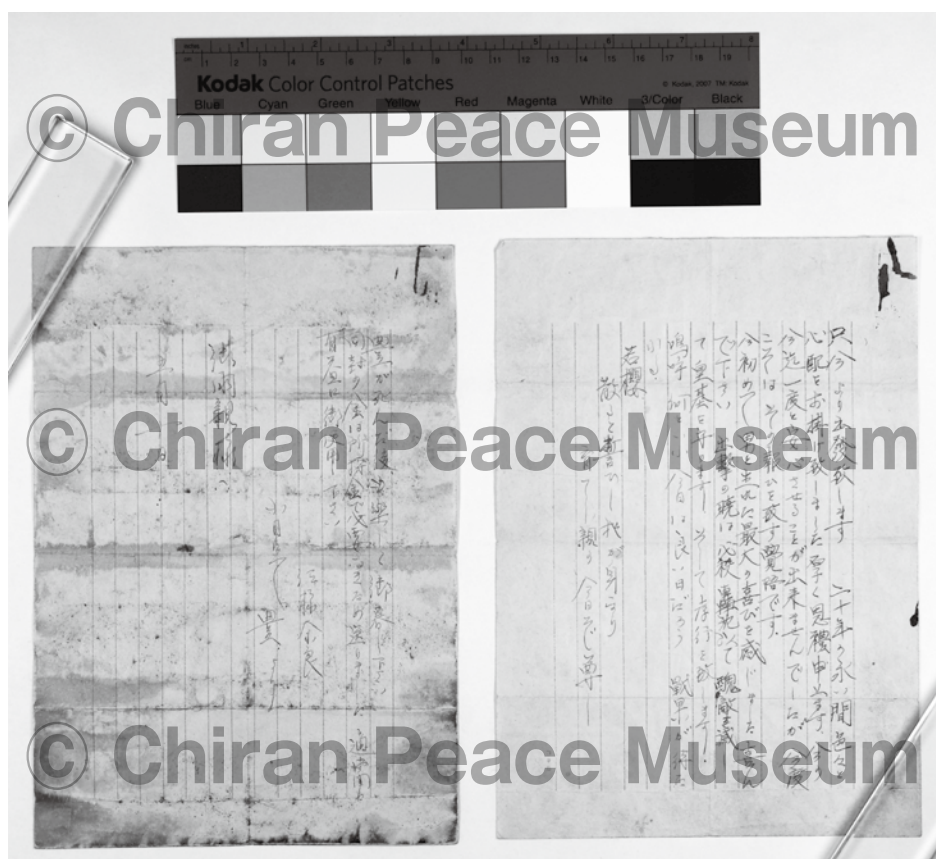


写真16 資料9 藤田文六少尉遺書① (表面)



写真17 資料9 藤田文六少尉遺書② (裏面)



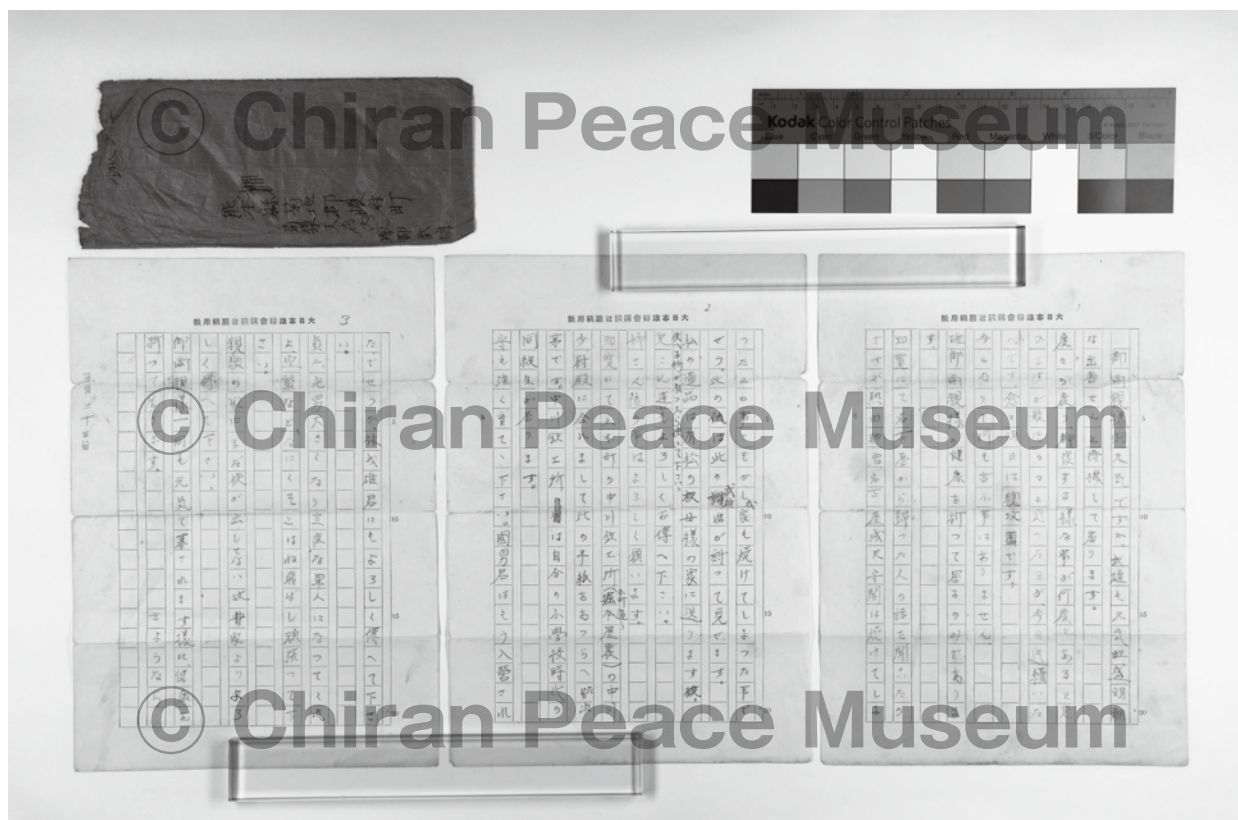


写真18 資料10 服部武雄少尉遺書



写真19 資料11 美野輝雄少尉絶筆

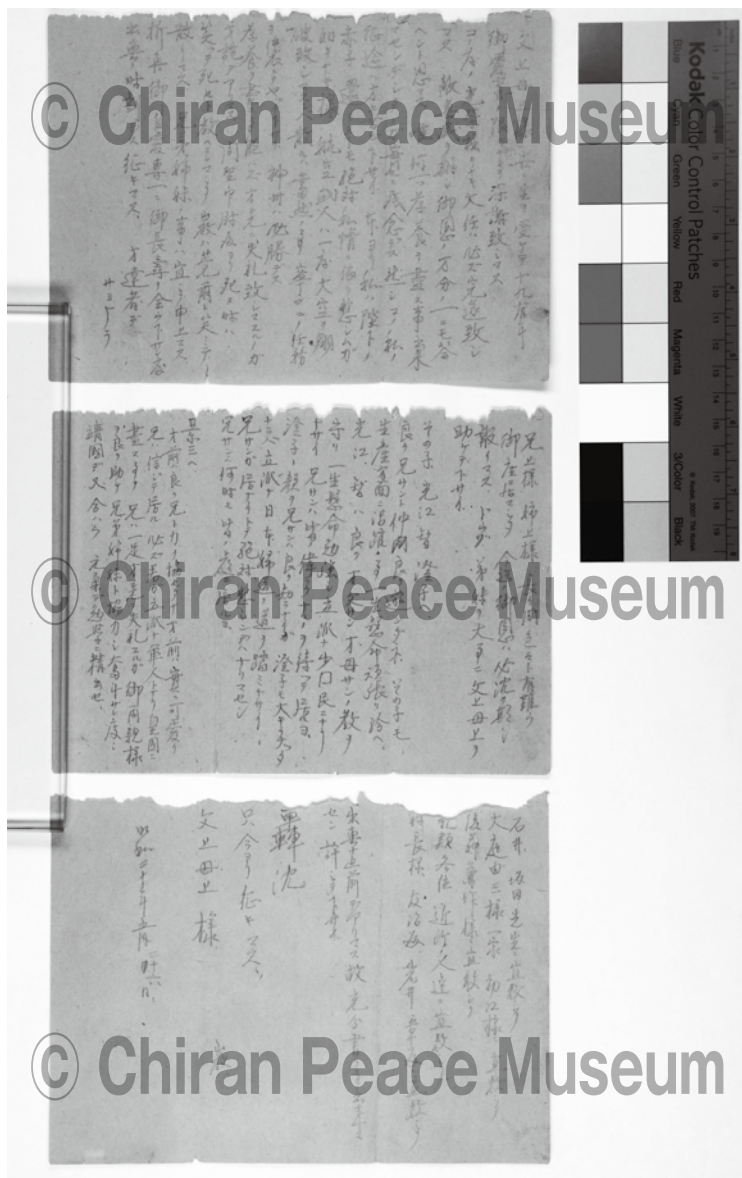


写真20 資料12 太田巖軍曹絶筆



写真21 資料13 宮井政信少尉遺書

写真22 資料14 大岩泰雄大尉遺書

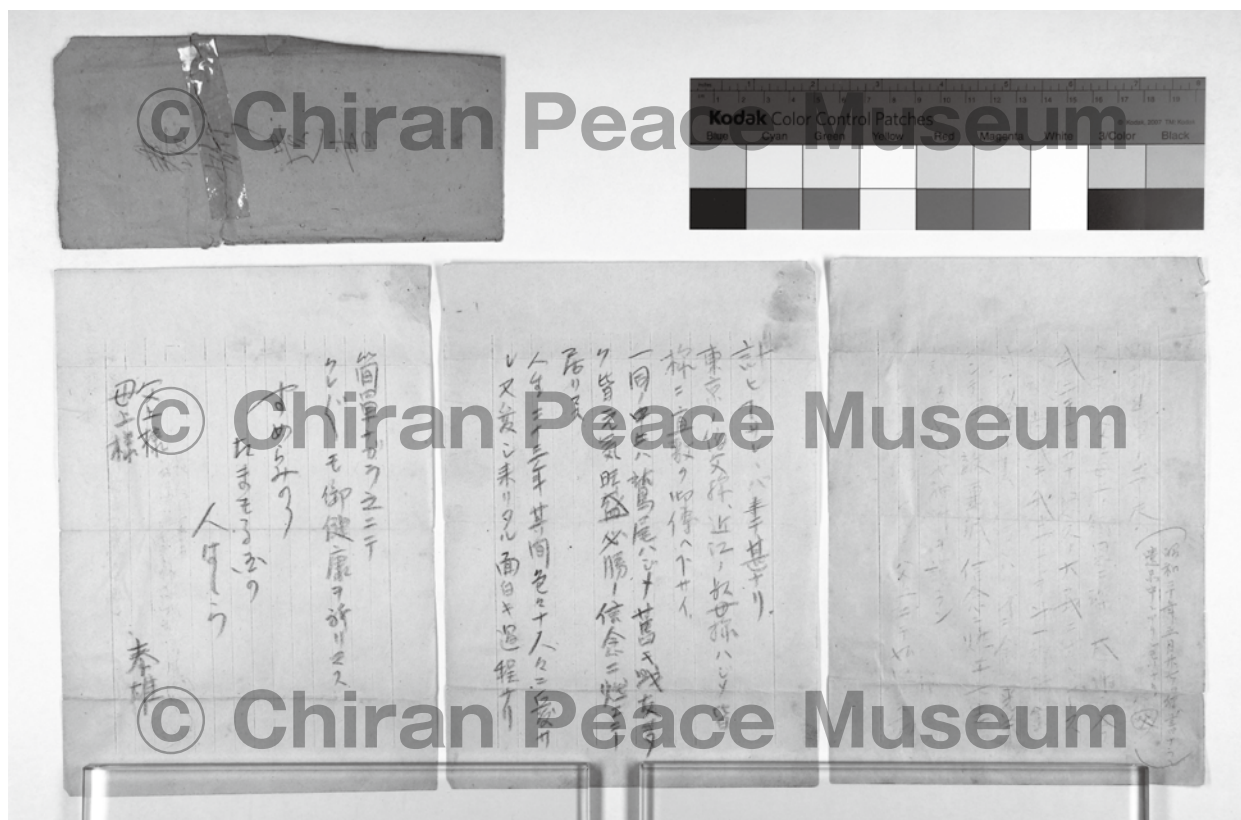


写真23 資料15 深田末義少尉遺書

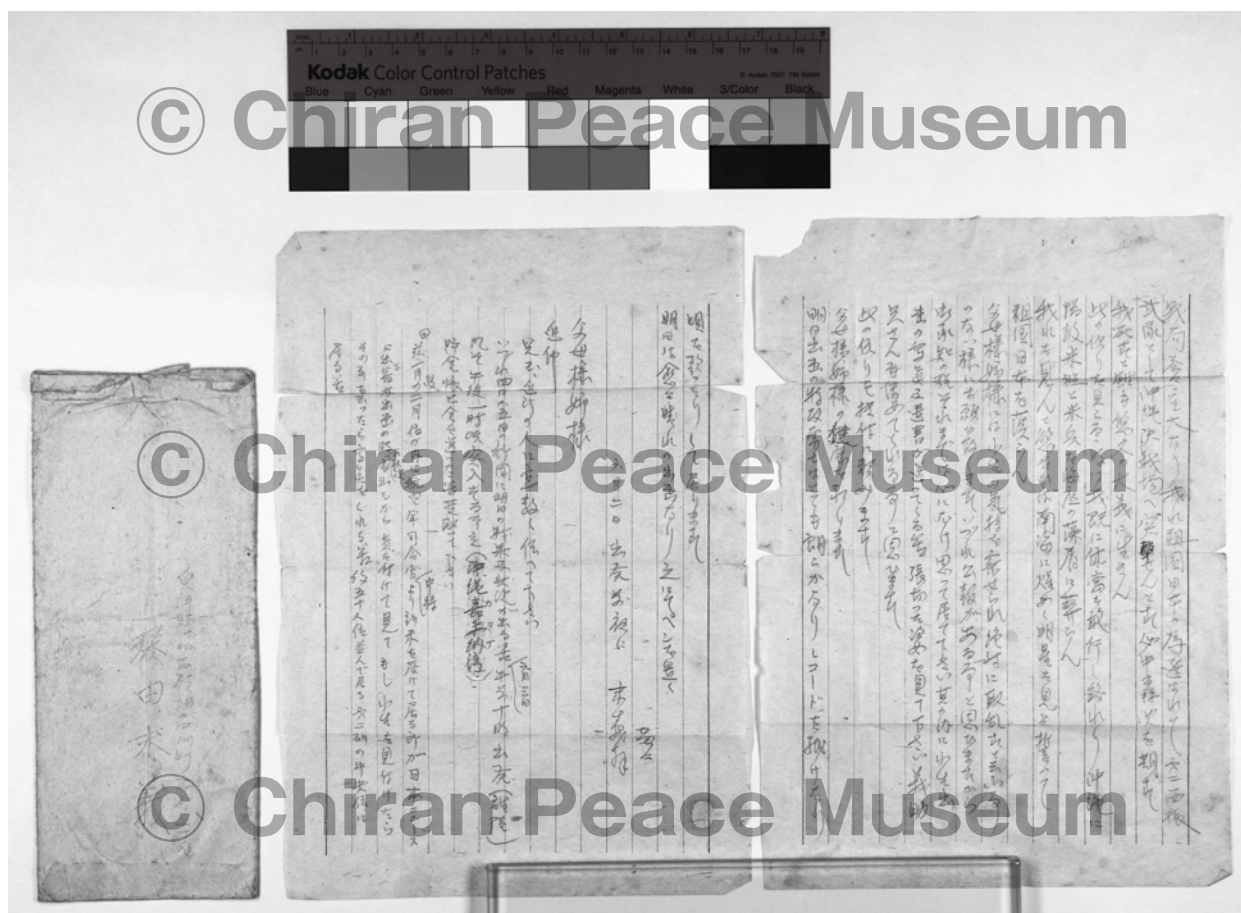


写真24

資料16 生駒寛彦大尉遺書

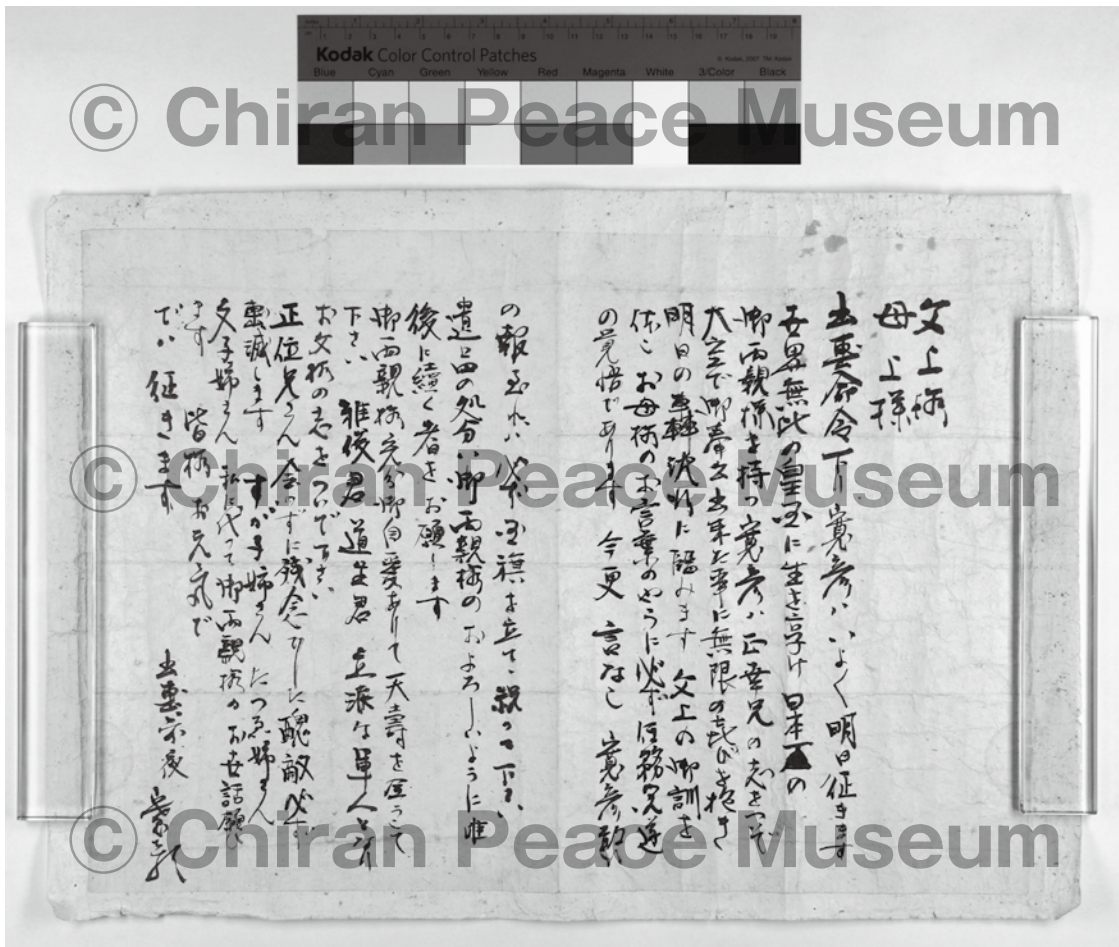
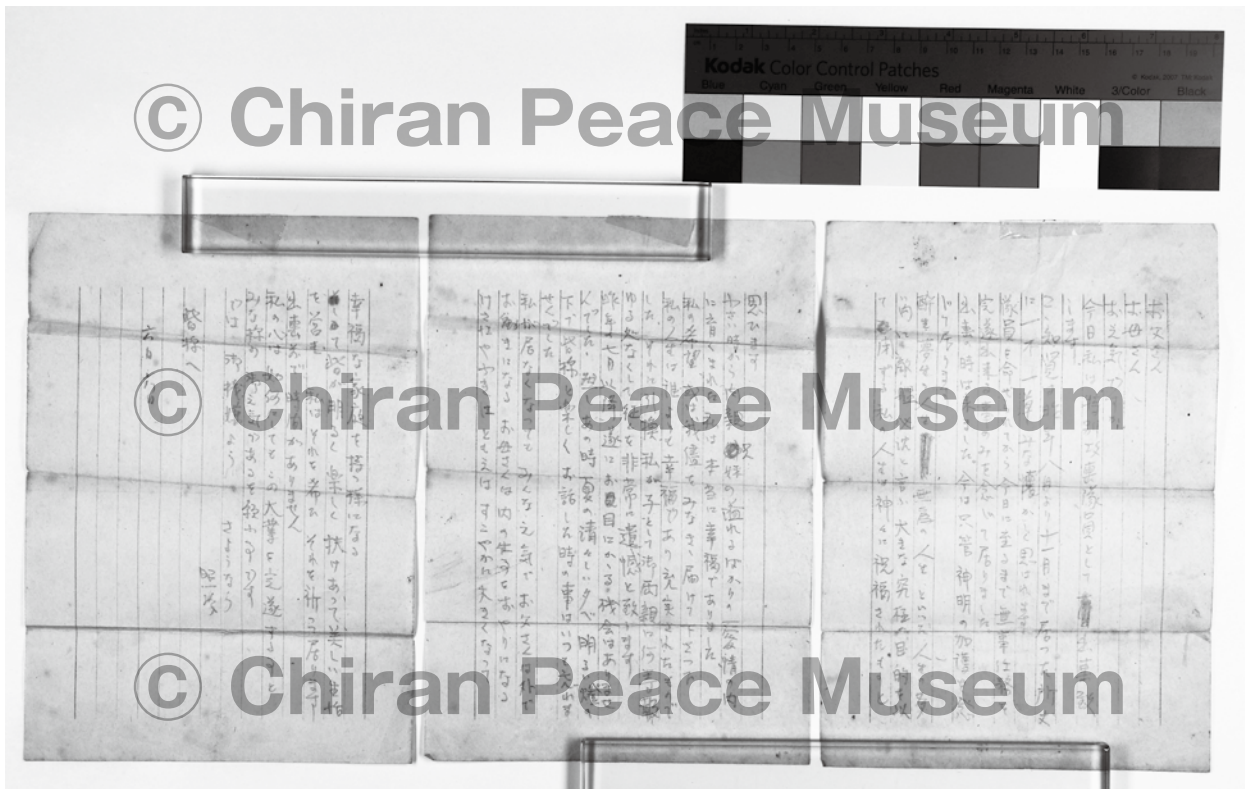


写真25

資料17 中嶋璋夫少尉遺書





4. 今後の課題

（1）指定物件の再検討

水川豊少尉遺書は、特攻戦死する前日である五月十日の日付があることから出撃直前ではあるものの、「小月にて」という記載から、山口県にあった小月飛行場で記された可能性が高い。上成義徳少尉遺書は、「出撃前夜」という文言以外に記載時の状況が不詳であり、知覧における出撃前夜ではなく別な飛行場から知覧飛行場へ進出する際の前後であった可能性もないことはない。

（2）追加指定の候補資料

本稿で紹介した指定資料以外の手記を、いくつか挙げておく。石倉三郎大尉（昭和二十年四月十六日戦死）の遺書には、四月十三日の日付があり、「御恩の万分の一をも孝養出来ず死に赴くは誠に残念ですがお許し下さい」などの記載がある。荒川宜治大尉（昭和二十年五月二十五日戦死）の遺書には、五月二十一日の日付があり、「今ノ心境ハ、今迄ニシタ試験勉強ノ努力ヲ入学試験ニ行ッテ受ケルヤウナ気持デス」などの記載がある。樺山資彦大尉（昭和二十年五月二十五日戦死）の遺書には、「鹿児島知覧」「明日は愈々晴の出撃です」などの記載がある。佐々木暹少尉（昭和二十年六月三日戦死）の絶筆には、「今日出撃いたします」「六月二日の十三時頃突込みます」などの記載がある。鈴木邦彦大尉（昭和二十年五月二十八日戦死）の遺書には、「愈々征きます」の記載がある。

一方、三村龍弘少尉（昭和二十年五月二十五日戦死）の遺書は、「いよいよ出撃致します」という記載があっても四月二十一日の日付が付されている。佐藤新平少尉（昭和二十年四月十六日戦死）の日記の四月四日の項には、「愈々明日出發」「御両親様、日記を今日で終わります」、五日朝の項には「出陣ノ朝」という記載がある。最後

の出撃の日までの記録を、個別に検証していけば、どの段階でどの場所では記されたのかが見えてくるだろう。若松藤夫少尉（昭和二十年六月三日）の絶筆には「最期の又最初の孝行に笑って征きます」と記載されている。記された時期が詳らかでない手記でも、出撃を前にして記された可能性が考えられるものもある。

（3）紙と筆記具の種類

紙の種類は、便箋・白紙・原稿用紙などがあり、筆記具にはインク（万年筆または付けペン）、鉛筆、色鉛筆がある（表4）。出撃を目前にした特攻隊員の、身の回りにどのような紙と筆記具があったのかということを知ることができる。同じ原稿用紙を用いた藤田少尉と服部少尉は、所属部隊は異なるが、少年飛行兵第十四期と同期出身で、同じ日に特攻戦死している。出撃命令を受けた後に、彼らが計らって三角兵舎内で最後の手紙・遺書を認めたような光景が浮かび上ってくる。

（4）特攻戦没者の隊員情報

所属部隊、出身地、年齢、出身期別は、手記の記された背景がわかる情報である（表5）。これらの情報をもとに、手記が記された背景と内容を分析していくことは今後の課題である。

（5）種別、来歴等の附属情報

手記の種別は、知覧特攻平和会館への資料受入れ時に登録された資料品名を便宜的に用いている。実際には、種別名称の領域が重なるものもある。例えば、遺書や絶筆とされているものでも、文面の形式上は手紙であるなど明確な区別は難しい。種別の定義は、今後の課題である。

来歴を、表6に示した。来歴①は、手記の筆記者が誰を対象として記したものか、その経路は第3者の手を経て郵送されたものか（郵便封筒の有無）、それとも遺品として軍から遺族へ届けられたのか

を推測する情報、来歴②は、知覧特攻平和会館への寄贈者、寄贈された年、指定資料以外の手記の収蔵品の有無である。現時点では、これらがどのように反映されるかわからないが、特攻戦没者の手記を研究する上での附属情報として整理しておく。

まとめ

本稿では、南九州市指定文化財「知覧特攻戦没者の手記」について資料紹介を行い、資料的価値付けの視点や課題について提示した。この文化財は、出撃前日から当日にかけて知覧で記された資料群である。前日に記されながらも、天候不良等により出撃が延期したのも含まれる。出撃直前という視点は、文化財として取り扱うために有効であったと考えている。しかしながら、未指定の手記資料に対する優劣を測るためのものではないことは言うまでもない。

課題として挙げたように、将来、知覧で記されたか否かという規準を厳密に検証し、指定解除をも含めてリストを再検討する必要がある。と同時に、記された場所に捉われず、特攻隊が編成されて以降に記された広義の出撃直前という枠組みで再評価をするとなれば、追加指定を行っていくことも検討の余地はあろう。

特攻戦没者の手記内容に関する研究の展望として、筆記者の世代や経歴、所属部隊や出撃日などの、手記が記された背景と内容を分析していくなどの方法や、個人の手記を時系列的に読み込み比較することなどが考えられるが、今後の研究の手に委ねたい。

参考文献

森岡清美一九九一『決死の世代と遺書』新地書房
森岡清美一九九五「研究資料としての戦没者の既刊手記」『淑徳大学研究紀要』

第二九号 淑徳大学

（さかもと・こうた 南九州市世界の記憶推進室主査（学芸員））

表5 手記資料の筆記者の附属情報

	氏名と階級（戦死後）	部隊名	出身地	年齢	出身期別・学校
1	山田 勇 大尉	第68振武隊	京 都 府	21歳	特別操縦見習士官2期・専修大学
2	穴澤 利夫 大尉	第20振武隊	福 島 県	23歳	特別操縦見習士官1期・中央大学
3	中上 敬一 少尉	第40振武隊	岡 山 県	19歳	少年飛行兵14期
4	松原 徳雄 少尉	第106振武隊	和歌山県	19歳	少年飛行兵14期
5	上成 義徳 少尉	第80振武隊	鹿児島県	25歳	昭和12年入営
6	網代 一 大尉	第67振武隊	千 葉 県	25歳	特別操縦見習士官1期・専修大学
7	袴田 治夫 少尉	第106振武隊	静 岡 県	18歳	少年飛行兵15期
8	水川 豊 少尉	第70振武隊	佐 賀 県	19歳	少年飛行兵14期
9	藤田 文六 少尉	第70振武隊	三 重 県	18歳	少年飛行兵14期
10	服部 武雄 少尉	第105振武隊	愛 知 県	18歳	少年飛行兵14期
11	美野 輝雄 少尉	第29振武隊	兵 庫 県	20歳	少年飛行兵13期
12	太田 巖 軍曹	第110振武隊	静 岡 県	19歳	少年飛行兵15期
13	宮井 政信 少尉	第45振武隊	和歌山県	20歳	少年飛行兵13期
14	大岩 泰雄 大尉	第55振武隊	東 京 都	21歳	特別操縦見習士官・神戸大学
15	深田 末義 少尉	第214振武隊	鳥 取 県	21歳	航空機乗員養成所14期（米子）
16	生駒 寛彦 大尉	第113振武隊	滋 賀 県	23歳	特別操縦見習士官1期・京都薬学専門学校
17	中嶋 璋夫 少尉	第113振武隊	山 梨 県	19歳	少年飛行兵15期
18	和田 照次 大尉	第165振武隊	長 野 県	21歳	特別操縦見習士官2期・上田蚕糸専門学校

表6 手記資料の来歴

	手記 種別	来歴①（手記の宛先）						来歴②（平和会館への来歴）		
		父親	母親	兄弟姉妹	婚約者	その他	経路	寄贈者	寄贈年	他の手記
1	日記					○		遺 族	H20	
2	手紙				○			婚約者	H22	
3	遺書	○						遺 族	H25	あり
4	遺筆					○		遺 族	H 8	あり
5	遺詠					○		遺 族	H25	あり
6	遺書		○					遺 族	H 2	あり
7	遺筆	○	○					遺 族	H25	あり
8	遺書	○	○					遺 族	H25	あり
9	遺書		○					遺 族	H25	
10	遺書	○	○					遺 族	H 7	
11	絶筆	○	○				郵便	遺 族	H25	あり
12	絶筆	○	○	○				遺 族	H 9	
13	遺書		○					遺 族	H25	
14	遺書	○	○					収集者	H 6	
15	遺書	○	○	○			郵便	遺 族	H24	あり
16	遺書	○	○					遺 族	H 2	
17	遺書	○	○					遺 族	H18	あり
18	遺書	○	○	○				遺 族	H25	

<要旨>

南九州市教育委員会は、太平洋戦争後 70 年目を迎えた 2015（平成 27）年に、知覧特攻平和会館に収蔵されている特攻隊員の手紙や遺書などを「知覧特攻戦没者の手記」として文化財に指定した。筆者は、当時、南九州市教育委員会文化財課に所属しており、文化財指定の事務に携わった経緯がある。筆者は、知覧から出撃した特攻戦没者の手記のうち、知覧において最後の出撃命令を受けた後に出撃直前に書かれたであろう手記という基準を設けることで、特攻隊員の書いた個人的な記録を歴史資料として捉えることができると考えた。資料は、南九州市が世界記憶遺産に申請したリスト 333 点を対象として、その中から 18 点を選定した。本稿では、「知覧特攻戦没者の手記」を歴史資料として捉えた視点を示し、それぞれの資料に書かれた内容を紹介した。課題として、知覧で記されたかどうかの厳密に検証することや、あるいは場所に捉われず広義の出撃直前という枠組みで定義を見直すことも検討の余地がある点を挙げた。

<Summary>

Handwritten Memoirs of the Kamikaze Pilots Designated as Cultural Properties of Minamikyushu city

Minamikyushu City Board of Education designated the “Kamikaze Pilots’ Wills and Letters in Chiran”, conserved at the Chiran Peace Museum, as Cultural Property in 2015, 70 years after World War II. At that time I worked for the Cultural Assets Department of the Minamikyushu City Board of Education and was involved in establishing these documents as Cultural Property. My work has led me to the conclusion that the personal written records by the Kamikaze pilots, those written between receiving the last sortie order and before the sortie itself, can be used as historical records. Using this as a standard, we have selected 18 of them from out of 333, from which Minamikyushu City had applied for World Memory Heritage. In this paper, I have focused on certain aspects of the “Handwritten Memoirs of the Kamikaze pilots” and indicated their value as historical records. Further work will concentrate on refining the standards we use for historical records, and as long as these documents were written just before the sorties, ascertaining with greater certainty the location where they were written.